

2015 年前期 政治過程論

成績を出しましたので、講評を行います。今年の問題は以下の通りです。例によって二問中一問選択です。

1. 事例研究にはセレクション・バイアスがつきものであると言われる。満遍なく事象を説明するよう事例に目配りすることは難しく、説明に都合のよいものを選んでしまっていることが多い、というものだが、ダール (R. A. Dahl) の Who Governs? に対するバカラックとバラッツ (P. Bachrach and M. S. Baratz) の批判もその点を突いてのものだった。どういうことなのか、説明せよ。

2. 鉄の三角形 (Iron Triangle) は、シャットシュナイダー (E. E. Schattschneider) の「紛争の社会的拡大 (socialization of conflict)」理論においては、「私化 (privatization)」の極に置かれる。どういうことなのか、説明せよ。

まずは選んだ設問と成績の分布から。

2 回生で 1 を選択した者

A + 1 名、A 1 8 名、B 2 2 名、C 2 2 名、F 1 1 名 計 7 4 名

2 回生で 2 を選択した者

A + 6 名、A、8 名、B 1 5 名、C、2 名、F、3 名 計 3 4 名

3 回生で 1 を選択した者

A + 0 名、A 0 名、B 6 名、C 6 名、F 2 名 計 1 4 名

3 回生で 2 を選択した者

A + 0 名、A 9 名、B 2 名、C 4 名、F 0 名 計 1 5 名

4 回生以上で 1 を選択した者

A + 0 名、A 0 名、B 2 名、C 9 名、F 0 名 計 1 1 名

4 回生以上で 2 を選択した者

A + 0 名、A 3 名、B 1 名、C 1 0 名、F 0 名 計 1 4 名

全体として 2 問とも難易度に差はないと思うのだが、成績は 2 を選んだ人の方が良いようである。おそらく、2 問目はあまりひねりがなく勉強したことをそのまま書けば正答に近づけるものだったのに対して、1 問目はセレクション・バイアスを指摘しての批判であるというところを説明せよ、となっているのを無視して、ダールと非決定理論の関係で調べたことをそのまま書いた答案が多かったせいだろう。

1 問目について、ダールはどのような方法を用いて多元主義の主張を行ったか、これに対してバカラックとバラッツはどのような主張でこれを批判したか、という政治学理論史上の基礎知識二点が押さえられていること、これに加えてダールの事例はセレクション・バイアス批判を免れ得ないものであったことが語られていたらだいたいOKなのだが、この三点目についてあまりきちんと書いていない答案が多かった。ダールの事例選択が現地で話題になったものを集めていて、そうであるのなら、重要であると人々が考えたものを重要であるとしているので、ハンターを批判した論法と同様のことが言えると記された答案が結構あったのだが、そういう解説がどこかで行われているのだろうか。ダールは人々の認識を介在させて事例選択を行っているわけではないので、やや戸惑った。ハンターとミルズを混同する記述や、バラッツのみを取り上げる記述などもあり、この辺りは減点対象とした。要するに3つの事例が政治過程、権力過程を語るのに十分、実情を代表しているかどうかの検証がなく、先験的に重要としているのが問題なのである。

以上の3つの注目点がきちんと過不足なく書けていればA、いずれか1点が不十分だが2点は大丈夫のものがB、どれも大丈夫とは言えないが、なんとなく救えるものがC、救いようのないものがFとなった。Fの答案の中には全くの白紙や両方に数行ずつ触れたものも多いのだが、整理の都合上、明瞭に2に回答するとしてFとなったもの以外はすべて1のFとして集計した。A+はここからさらに進んで権力論のありように触れた答案に与えられた。

1の回答者でA+をとれたのは2回生、■■■■のみ。

2 問目については、まず、鉄の三角形がきちんと説明できること、そして、シャットシュナイダーの「紛争の社会的拡大」理論が説明できて、privatization と socialization は紛争の範囲の広狭がポイントであり、狭く押しとどめようとする方向が私化となるので、鉄の三角形はまさにそれだ、と結論づけられればよい。鉄の三角形については、もとのヘリングの議論のときからそうなのだが、これは政治過程論の分析概念であって、政治体制論の議論としてはあまり使わない。使ってもいいが、そうすると政治過程論の議論にならない。講義でもかなり注意して説明したつもりだが、政・官・財、特に財界と言ってしまうと、それぞれが一枚岩で利害を共有する存在になってしまい、その中で相争う（相互作用する）諸々のアクターが見えなくなるので、政治過程論的観察を放棄した議論になっていくのである。こういう記述がこの学部で私以外からも政治過程論の説明を聞いているはずの学生の書いたものから見つかるのは心外である。まった

く政治学の勉強をしていないのだろうな、と思った。

紛争の社会的拡大は、確かに圧力政治への批判なのだが、規範的批判を行っているわけではない。鉄の三角形型の政策形成過程があること自体をシャットシュナイダーは断罪しているわけではない。これをすべてにしてしまう集団理論に対する理論的批判が行われているのであって、圧力政治が悪い政治だといっているわけではない。このあたりが理解できていないと思われる答案も多かった。この学部にはそういう単純な規範論を振りかざす先生はいないと思うのだが・・・。

紛争の範囲に注目して公共の利益を政治が導き出すには、紛争の感染性をうまく利用して、私化の鉄の三角形政治に任せるもの、拡大して公共の問題解決に導くもののコントロールを政党こそが行うべきだ、というのがシャットシュナイダーの議論だった。

この辺り、鉄の三角形、シャットシュナイダー理論、彼のバイアスとは紛争範囲の広狭に注目してのものだから、鉄の三角形は私化の極に置かれている、という結論、以上三点が過不足なく書かれていればAの答案になる。Bは1点は怪しいが2点についてはきちんと書かれている答案になるのだが、この構成からすれば、1つだけだめだがあとは良いというのは難しい。鉄の三角形が体制論になっていれば、私化に持っていくのは難しいだろうし、そもそもシャットシュナイダーの「紛争の社会的拡大」理論が理解出来ていなければ、2点目も3点目も無理だろうからだ。それでもBになっている答案は論理的な接合をあえて無視して、2点クリアしていると無理に読んだ答案である。Cは例によってすべて非常に怪しいが全く出来ていないわけでもなさそうな答案、Fはどうにも救いようのない答案である。

例によって「粉」争も結構見た。シュナイダーと勝手に改名するものもあった。答案は丁寧に書いて、漢字の間違いのないように見直してから提出してほしい。時間がなくてというのなら我慢できるが多くの学生が途中退席していながら、こんなものを出すのか、とも思ってしまった。

2の回答者でA+は、■■■■■、■■■■■、■■■■■、■■■■■■■、■■■■■、■■■■■■■の六名。中でも、■さんの答案は短く、書くべきことを的確に書いた完璧な答案であった。